

湯けむりの仲居さんは、年下の湯治客の前でだけ
女に戻る――雪の宿、誰も来ない夜の秘めごと――

山あいの鄙びた温泉宿。客あしらいの隙ない仲居が、長逗留の年下客の前でだけ、冷えた結婚で忘れていた女の顔をほどいていく、雪夜の背徳純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

この宿を訪れる客はみな、立花香織たちばなかおりを「よくできた仲居さん」だと言う。

雪見荘の暖簾をくぐれば、いつも玄関の三和土に膝をついて出迎える。膳の上げ下げに無駄がなく、湯加減を尋ねる声は低くやわらかい。客の名を一度で覚え、けっして余計な踏み込みをしない。鄙びた山あいの湯宿には不釣り合いなほど、隙のない、品のいい人だった。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別の女のように息を乱している。

雪の夜の静けさが、奥座敷の隅々まで満ちていた。表の灯りはとうに落とされ、行灯のほのかな橙だいだいだけが畳を照らしている。障子の向こうでは、音もなく雪が降り積もっているのが、青白い雪明ゆきあかりでわかった。山あいのこの宿は、今夜、世間からすっかり切り離されている。

昼間の香織を思い浮かべる。深い色味の着物にたすきを掛け、前掛けの紐をきりりと結んで、廊下を音もなく行き来する後ろ姿。「瀬戸さま、お加減はいかがですか」と、いつも一步引いた距離から微笑む横顔。膳を運ぶ手つきの、寸分の隙もない丁寧さ。湯加

減を尋ねる、低く落ち着いた声。客の誰に対しても崩さない、あの折り目正しい佇^{たたず}まい。

この宿に着いた日、雪まみれで凍えていた俺を、最初に迎えてくれたのも、この人だった。あれから数週間。冷えきっていた体も心も、この湯と、この人のそばで、ゆつくりとほどけていった。そして気づけば、俺は——客と仲居の、越えてはならない線の、ずっと向こうへ来てしまっていた。

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

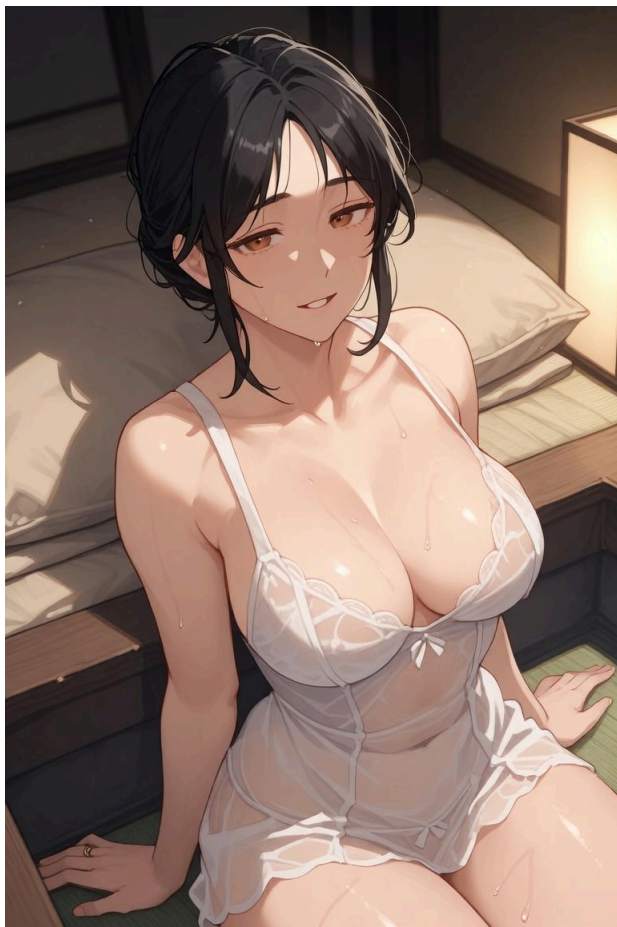
「……湊^{みなと}さん」

ゆるく結い上げていた黒髪が、いつのまにか解けて、白いうなじと頬に幾筋も乱れて落ちていた。いつもは静かに伏せられている目もとが、今は潤んで、すぐるようにこちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が行灯の灯をにぶく弾いた。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させる。

雪に閉ざされたこの宿で、今この奥座敷に満ちている熱を、知る者は誰もいない。表の世界も、街ににいるという彼女の夫も、何ひとつ気づいていない。それでいい、と湊は

思った。この雪夜は、二人だけのものだ。山ひとつ越えれば、何もかもが慌ただしく回っている世界がある。けれど、今この瞬間、二人を包んでいるのは、雪の静けさと、行灯のひとつぶの灯と、互いの体温だけだった。

それでも――俺だけが知っている。隙のない「仲居さん」の顔の奥に隠された、この人の、女の顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——